

氏 名 伊藤 奈保子

学位（専攻分野） 博士（学術）

学 位 記 番 号 総研大甲第 793 号

学位授与の日付 平成 1 6 年 9 月 3 0 日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学 位 論 文 題 目 インドネシア宗教史における鑄造像・法具の展開－日本と
の比較－

論文審査委員	主 査	教授	早川 聞多
		教授	稲賀 繁美
		学長	頼富 本宏（種智院大学）
		教授	宮治 昭（名古屋大学）

論文内容の要旨

インドネシア、特にジャワにおいて、イスラム化される以前、ヒンドゥー教と仏教、密教の宗教が並存し、ジャワ独自の信仰があったものと考えられている。しかし、その実態は未だ明らかにされていない。そこで、本論では、当地にどのような宗教形態があったのかを、美術遺品である宗教鑄造像、および法具といった新資料から復元することを主題とする。そしてインドネシアの宗教、とくに密教形態を把握した上で、同時代、日本で栄えた密教との比較を試みるものである。

第1章では、「イスラム以前のインドネシアにおける宗教に関する基礎概念」として、当地において存在したヒンドゥー教と仏教とはどういったものだったのか。ヒンドゥー教、仏教がいかに規定されてきたかを確認しておく必要から、第1節にヒンドゥー教、第2節にヒンドゥー教の影響を受け仏教が変化して密教が成立するに至る状況を解説する。密教は、その時代、内容から分類法が数種ある。その中で、本論では、暫定的に『大日経』『金剛頂経』といった両経典を基礎にした、初期・中期・後期に分けられる三段階の分類を用いて、美術遺品を分析することとする。この分類法がインドネシアに妥当するか否かも、最終的に検討する。第3節では特に仏教、密教の尊格が経典をもとにどのように造形化されるかを歴史的流れにそってのべる。

第2章では「イスラム以前のインドネシアの宗教史」と題し、鑄造像・法具だけでは読みとれないインドネシアの宗教形態を、文献・碑文等、遺跡をもとに、先学諸氏の先行研究を参考にしながら確認しておく。仏教、密教が流布し、信仰されたであろう年代、5世紀から15世紀にしばらく考察をおこなう。第1節ではジャワ島やスマトラ島の王朝の変遷、第2節では代表的な寺院をとりあげ、信仰の傾向をみる。

第3章では「インドネシアの宗教鑄造像」として、筆者がジャワ島の10ヶ所の博物館、及びヨーロッパの21ヶ所の博物館と資料館で調査した実物および出版資料をもとに、現在まで確認されている鑄造像総体を形状から分類する。インドで誕生した順に、第1節はヒンドゥー尊、第2節は仏教尊、第3節は密教系尊、および本論に関わる調査で、密教のなかでも中期密教の図像に対応する金剛部系尊の作例の存在が明らかとなったので、第4節に項目をもうけ、全体を4つに大別し分類を行う。各像容の詳細をのべ、可能な限り梵本経典、及びその注釈、漢訳経典、図像等の文献を対照しつつ考察を行う。また、日本において対応する像を取り上げる。

第4章では法具、すなわち儀礼をおこなう道具について考察を行う。インドネシアにおける儀礼の記録は現在のところ報告がされておらず、また法具に関する研究も数すくない。鈴杵の一式がみられ、また鈴のなかには中期密教と、中期から後期密教にかかる経典に対応する図案（四種三昧耶形、八種三昧耶形）も確認することができた。このことは、インドネシアに密教の儀礼が行なわれていた可能性を示唆するものであろう。第1節では、その鈴杵の形態について概略をのべ、第2節では密教系の鈴杵について、五鈷鈴をとりあげ、続く第3節では五鈷鈴以外の鈴についてみてる。これらを考察することでジャワの宗教の一端が看取されるものと考えられる。

第5章では、「イスラム以前のインドネシアにおける宗教の特質」と題し、第3章、第4章でとりあげた鑄造像と法具を、その形態、および数、地域や時代を表化、地図におと

すなど統括的に分析する。そこから、どのような宗教形態がインドネシアにあったのか考察を行う。法具の形状の特徴から、地域と時代に変化がよみとれることを確認する。あわせて8世紀頃から密教の儀礼が行なわれ、それが中部ジャワ地域から東部ジャワ地域にひろがっていったことをのべる。また、鑄造像において、ヒンドゥー教、仏教、密教の作例が、7世紀～11世紀頃にかけて中部ジャワ地域を中心に、東部ジャワ地域等にみられることから、3つが並存して制作されていたことを確認する。そして、それがイスラム化される以前の、インドネシアの宗教の特徴であることをのべる。特に、密教においては、中期から後期にかけての金剛部系の尊格が同定できる作例が確認されたことから、そうした密教がインドネシアでどのような形態、および認識に基づいて信仰されていたかを考察する。数の上では仏教系がヒンドゥー系の尊を上回るが、寺院に祀られるような大きな石像が確認できないこと、民間信仰と結びつき像容が変化を遂げた作例がみられないこと、ヒンドゥー系尊と矛盾することなく同時期に制作される理由等から、ヒンドゥー教のようにメインに祀られることなく、一部の限られた層に教義を熟知されぬまま信仰されていたであろう推察をのべる。また鑄造像の機能としては、念持仏、儀礼の対象であったのではないかと考察する。あわせて密教の三分類法が『大日経』『金剛頂経』の両部大経が確認できないインドネシアでは、適合しないのではないかという推測も展開する。

最終章では、第5章のまとめから、日本とインドネシアにおける密教の受容の比較をおこなう。両地域において、存在した密教は、どのような差異をもっていたのか、その受容形態に、歴史的、あるいは社会的な差異があることを導き出す。加えて像容の形態として、インドネシア、日本に共通して尊名同定可能なものは認められるものの、機能や信仰が必ずしも一致するとは限らないことを問題として指摘し、具体的な作例をあげて検証する。

論文の審査結果の要旨

伊藤奈保子の論文は、インドネシアにおけるイスラーム期以前の宗教遺物、とりわけ世界各地の公共機関に保存されている鑄造像と法具を網羅することにより、その実態に迫ろうとするものである。具体的には(1)インドネシアに仏教における密教は存在したか、(2)それはどのような信仰形態だったか、(3)そこには日本の密教と比較していかなる特質が認められるか、ということ为主要な目的としたものである。

本論文が達成した成果として、以下の諸点が評価される。(1)仏教系のみならずヒンドゥー教系もふくめ、確認可能な作例を網羅的に調査して、インドネシアにおけるイスラーム以前の鑄造像および法具の全体像を整理したこと。こうした試みに先行研究がなく、とりわけその写真資料とデータは、今後の研究にとってきわめて有用な資料として活用できる。(2)鑄造像に関しては、推定される尊格名と形態によって分類・整理を行い、遺品の全体像を歴史的・地理的な変遷を含めて、把握可能なかたちで提示したこと。(3)以上の作業を通して、従来見落とされてきたインドネシアのイスラーム以前の宗教特性について次のような成果を齎したこと。(3-1)松長恵史の先行研究を補完するかたちで金剛部系の密教の存在が追認された。加えて金剛鈴に確認された三昧耶形の線刻から、理趣広経系の密教の存在を推定した。(3-2)仏教の中部ジャワ(7-10世紀)から東部ジャワ(10-16世紀)への展開にともない、金剛鈴、金剛杵と呼ばれる二種の法具において、中部ジャワでは先端の閉じたものが出土するのに対して、東部ジャワでは先端の開いたものが発見される、という様式上の展開が立証された。(3-3)石像には巨大な作例が見られるのに対して、鑄造像は概して小型であることから、鑄造品は念持仏として私的な儀礼に用いられたのではないか、とする仮説を導いた。

このように本論文は該博な専門知識と具体的成果において専門家を含む審査委員の高い評価を得たが、同時にいくつかの課題を残している。(1)本研究を生かして研究をより発展させるために、より広くインドネシアの文化史やインドの宗教史の知識を加えること。(2)また整理した資料に基づいて独自の仮説を展開するために、尊名の判定、或いは教義と形状との齟齬を巡る問題を掘り下げる必要がある。例えばガネーシャのインドネシアにおける独自の展開と日本での変容の比較、またヒンドゥー教信仰の存在した地域に降三世に踏みしだかれるヒンドゥーの尊格が出土する問題、さらに毘盧遮那すなわち大日からヒンドゥーの神々が生まれるとするサン・ヒアン・カマハーヤニカン経の意義検討などに関しては、さらに踏み込んだ解釈が必要であろう。(3)金剛界系と胎藏界系の両部密教が発達した中国及び日本での密教体系を準拠枠として、それをインドネシアの造像に当て嵌める方法の限界を冷静に反省し、インドネシアでの造像の解明には、ヒンドゥー教や密教化する以前の仏教をも視野に収めた考察が必要であろう。ただしこうした方法論についての課題は、口頭発表の際に論者より明確な補足説明が与えられたことを付言しておきたい。

以上のように本論文には今後の課題も指摘されるが、これまで研究者が手がけて来なかった領域の膨大な資料を丹念に整理した意欲と尽力には躊躇なく労作との評価を与え得るものである。特に資料編纂の部分は、必要な修正により直ちに密教図像学などの専門領域に寄与するだけの力作であり、申請者自身の今後の研究発展の可能性を示唆している。以上の判断を踏まえて論文審査にあたった五名の審査員は、合意のうえ本論文を「国際日本

研究」専攻の博士論文として認定するに値するものと判断した。